

新版 質的研究入門 <人間の科学>のための方法論』, 2011, ウヴェ・フリック著, 小田博志  
監訳, 春秋社

## 第10章

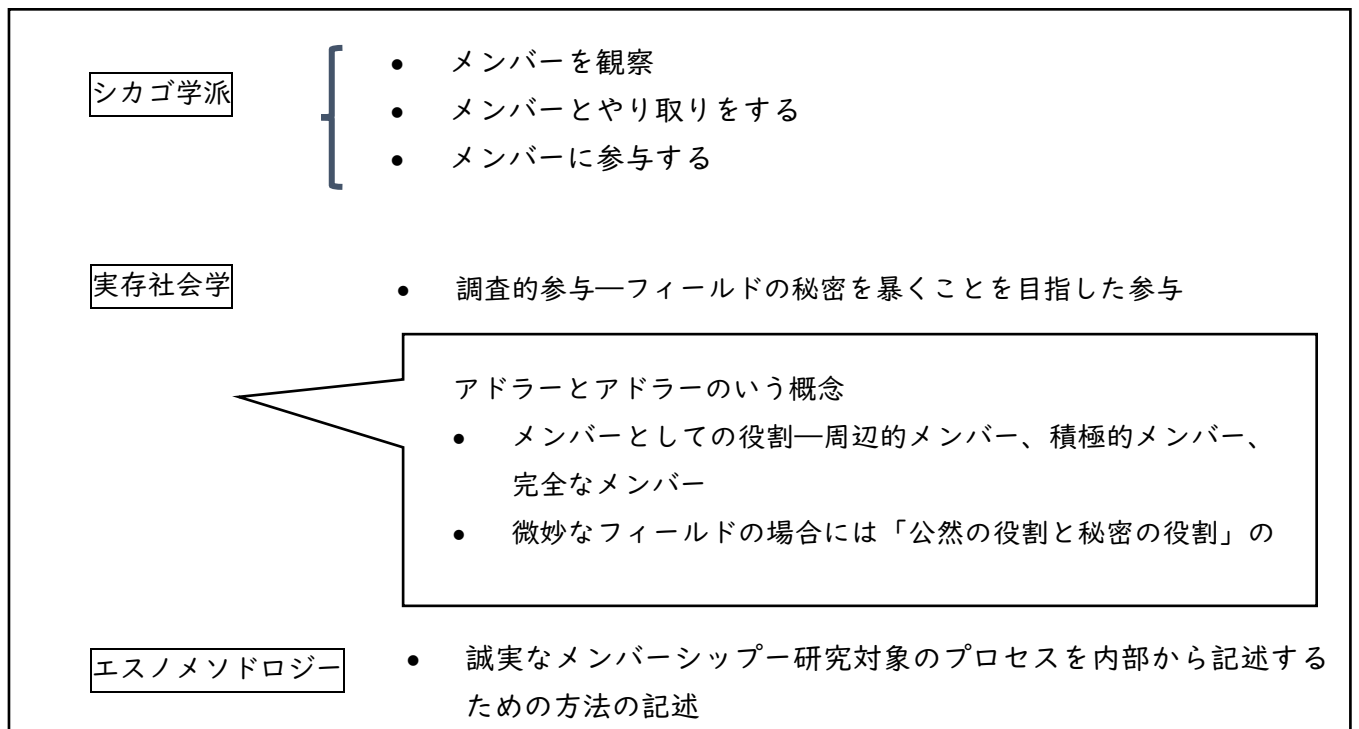
### フィールドへのアクセス(pp. 127-138)

#### 【質的研究者の期待とアクセスの問題】(pp. 127-128)

- いかに関フィールドや個人にアクセスするかは質的研究の場合の方が重要な問題となる
- 「フィールド」: 特定の機関や施設、サブカルチャー、家族、行政や企業の意味決定者などを意味する
- どの場合でも「調査参加者との協力関係をどう構築するか」、「実際にインタビューをしたりするところまでどうこぎつくか」、という問題が生じる

#### 【開放的なフィールドに入るときの役割の定義】(pp. 128-130)

- 調査者の人格(特にコミュニケーション能力)がデータ収集と洞察の主要な「道具」となる  
→調査者は中立の役割にとどまることができない
- フィールドで相互行為が進んでいく中で、役割が交渉されたり割り当てられたりする
- アドラーとアドラーがフィールドにおける役割を体系的に示している



#### それぞれの問題点

- シカゴ学派: 「対象」から科学的な距離を取ることに囚われすぎている
- エスノメソドロジーと実存社会学: 調査対象との一体化を目指してアクセスを

行おうとするアクセスの仕方

- そこでアドラーとアドラーは、もっと現実的なメンバーとしての役割を提起した

#### 【機関/施設へのアクセス】(pp. 130-132)

- 機関や施設を調査する場合にはアクセスの問題はより複雑になる
- 責任者のレベル→インタビューや観察に協力する人々のレベル
- ラウとヴォルフによると、行政機関のようなフィールドでは調査者はクライアント(依頼者)とみなされる
- 調査者は自分の要望を形式的な言い回しにまとめる必要がある
- 要望や付随する事柄は「公式の審査」にかけられる
- このプロセスを「合意形成の仕事(work of agreement)」と呼ばれ、互いに「仕事上の問題」として扱われる
- ヴォルフは調査フィールドとして機関に入る際の問題点をまとめていて(p. 131)、調査の目的や必要性に関する合意形成の失敗につながりうる要因を含んでいる

例) 日常への侵入

- 調査は日常の業務(ルーティーン)を乱すものであり、調査が以下の3点を意味するために機関側に不安をもたらす
  1. 自分たちの仕事の限界が明るみに出される
    - 調査の要望を拒否する十分な理由がない時には拒否する理由がでっち上げられることで、合意形成のプロセスで見られる非合理性の一部が現れる
  2. 関係構築の問題
    - 機関側が調査に関わるためには、研究者の人間性とその要望に対する信頼が育まれる必要がある
  3. 仕事上の協調関係
    - 信頼が強まることで、調査者と被調査機関の利害関心や視点の間にある埋め難い溝が狭まるかもしれない

#### 【個人へのアクセス】(pp. 132-133)

- フィールドの周縁にいる人ではなく、中心人物にアクセスできるか  
→雪だるま式にインフォーマントの輪を広めていく戦略、関係構築の能力が重要になる

例) 調査に対する不安(ケーススタディ 10.1 p. 132-133)

- カウンセリングにおける信頼に関して調査するため、インタビューと会話分析を用いた
- インタビューされることにはためらいを持ちながらもカウンセリングの録音を気に留めない人や、インタビューには抵抗がないがクライアントを相手にし

た具体的な仕事に踏み込まれることに抵抗を感じる人がいた

→調査に対して異なった問題、疑念、不安を持ちうる

- ある程度閉じたフィールドにいる人にアクセスする時はどう進んで調査に協力してもらえるかが問題となる

—特に、個人にアクセスする場合には見つけること自体が難しい問題となる

→メディアの利用や調査の対象となる人々がよく来る可能性のある機関/施設での掲示、雪だるま式に紹介してもらう

- しかし、雪だるま式で自分の人間関係に引っかかる人物が選ばれることの問題点もある

→ヒルデブラントはフィールドが見知らぬところであればあるほど調査者は新来者としてみなされ、新しいことを話してくれる

【未知性と自明性】(p. 134-138)

- 調査者は新しく入ったフィールドに馴染もうとする必要性に迫られる = 「プロのよそ者」

- それによってそのフィールドで当たり前になっていることを把握する

- その際にアウトサイダーの視点を保つことが大事

- よそ者は「訪問者」と「新入り」に分けられる

訪問者：一度のインタビューのために1回だけフィールドに現れる

新入り：フィールドでの参与観察が進行する中で徐々にアウトサイダーの視点を手放す

- フィールドで行われている活動には、外部向けに呈示されるものと内部者の間に留められるものがある

↑質的調査では、後者を調べることで個人や社会的集団のメンバーの視点から組織化の原理を理解する

↓しかし弁証法的な戦略には限界もある

- 調査者が調査者ということを隠すことで初めて内部だけの現実にアクセスできる場合もある

- ここで倫理の問題が出てくる—調査される人々の信頼や利益をどう守れるか、調査によって権利が侵害されるのをいかに防ぐか、自分の目的をどう扱うか

例) ストリート・コーナー・ソサエティ(ケーススタディ 10.2 p. 135)

→いかに研究者があるコミュニティへのアクセスを探して見つけるのか、そして特殊なサブカルチャーを形成する儀礼やルーティンを研究するのかを典型的に示すもの

〈まとめ〉

- 調査者は距離やバランスをとりながら被調査者と関わるかという問題が生じる
- その時にインサイダーとアウトサイダーどちらの視点を取るのか、その両方を取るのかを決めなければいけない

- ↑これは調査者にとってそのフィールドが未知なところか、熟知したところかで決まる
- 調査者が未知性と自明性のどこに位置付けられるかで調査方法の選択やアクセス可能部分も決まる

## 第11章

### サンプリング戦略(p.139-154)

#### 【研究プロセスにおけるサンプリングの決定】(p.139-140)

- 各プロセスによってサンプリングを決定することが必要

表11.1

研究の段階	サンプリング方法
データ収集	事例サンプリング(誰にインタビューするか) 事例グループサンプリング(どの集団から事例を得るべきか)
データ解釈	資料サンプリング(どのインタビューを文字化して解釈するか) 資料内サンプリング(どの部分を選択し解釈すべきか)
結果発表	発表のサンプリング(得られた結果を論証するためには、どの事例やテキストを使うのか)

- サンプリングの基準には、「抽象的」な基準と「具体的」な基準がある
- 【サンプル構造の事前決定】(pp.140-143)
- 「抽象的」な基準：調査対象の典型性とその属性の分布が実際に調べられる資料のサンプルに照応していることが前提
  - ↑部分的なサンプルの調査結果から調査対象の関係性が推論できるという統計学の考え方
- データ収集や分析をする前に基準が設定されるという意味で抽象的
  - 例) 事前に定義された社会集団におけるサンプリング(ケーススタディ11.1)
  - 事前に比較するグループを定義する方法
- データ収集のための事例のサンプリングはサンプル構造の枠をできるだけ均等に埋めること、全ての枠を十分に埋めることを目指すもの
- 完全調査：事前に特定の基準を設けてサンプリングを限定するもの(ゲアハルト)
  - 基準によって対象となる事例の総数が少なくなるため、全事例を研究に統合することが可能になる
  - 主に一定の地域における研究に用いる
  - 事例もしくは事例集団を選択するという観点からサンプリング決定が行われる
  - 資料のサンプリングは問題にならないが、資料の中でのサンプリングや発表のサンプリングに関する問題は重要となる
  - 限界としては、比較の幅があらかじめ限定されるため、真に新しい知見は得られ

ない

→そのため、特定の集団間において推定される共通点や相違点をさらに分析、細分化、検証するのに適している

【理論的サンプリング：研究プロセスにおけるサンプル構造の段階的確定】(pp. 143-147)

- 段階的なサンプリング戦略は大体が「理論的サンプリング」に基づいている
  - 理論的サンプリング：理論を産出するために行うデータ収集のプロセス。このプロセスを通じて分析者はデータ収集とコードかど分析を同時に行って、どのデータを次に収集してどこで見つけるのかを決定する
  - サンプル決定は①比較する集団のレベルで行う②特定の人物に焦点を当てて行う  
↑開発されつつある理論に関して新しい洞察がどの程度期待できるかによって決まる
  - 主要な問い①：データ収集を行う際に次にどの集団もしくは下位集団に向かうのか？  
→人物、集団、事例を複合的に比較する可能性は限りないため、理論的な基準に従ってサンプルを限定して行う必要がある  
例) グレイザーとストラウスによる病院における私の認識に関する研究(ケーススタディ 11.2 (p. 144))  
集中治療室やガン部門など色々なタイプの部門を見学する際、2つの枠組みに基づいて決定した：①一般的な概念図式②展開途上にあった概念構造
  - 重要な問い②：事例の取り入れをどの段階で止めるか  
→あるカテゴリーの特性を新たに展開できるデータが見つからない状態(理論飽和)になったら  
例) 信頼の役割に関する研究(ケーススタディ 11.3)  
・データ解釈の過程で形成されたデータベースの不完全な部分を埋めるために、二つの異なる職種から事例を収集・比較し、三つ目の職種(社会精神医学機関)を取り入れることで一つの領域内での視点の多様性が明らかにされた  
・この領域内の異なる施設を系統的に比較する方が有益そうであることが明らかになった
  - データ収集とその解釈の中で段階的に展開され、新しい次元を補われたり、特定の次元や領域に限定されたりする
- 【質的研究の一般原則としての段階的選択】(pp. 147-148)
- 理論的サンプリングは浮かび上がりつつある理論との関連性によって進められる
  - データとライアングレーション  
：時間・場所・人という条件の異なる多様なデータ源を統合すること。人物・集団、及び時間的休館に多様な状況を目的思考的かつ系統的に取り入れる上で理論

サンプリングの考え方を独自のやり方で実施した。

- 理論サンプリングを具体化してさらに発展させるもの→分析的帰納
- 分析的帰納：暫定的な理論を構築して、そこから逸脱した事例を探して分析し、統合することで理論を確実にする
- クライニングによると質的方法はあるレベルまで日常的手法を抽象化したもの
- 抽象化のレベルという考え方は理論的サンプリングが質的研究により適したサンプリング戦略であって、古典的なサンプリング戦略が量的研究の論理を志向するという主張を支えるもの

#### 【目的思考のサンプリング】(pp. 148-150)

- 段階的戦略では事例や資料の選択によっていかに目的を定めたサンプリングを進めるかという戦略が問題となる
- パットンは無作為抽出一般と目的志向的なサンプリングを対比(p. 148-149 参照)
- 研究の最後に得られる結果の一般化可能性はどの先約を選択かするかによって異なるが、質的研究においては事例が得られるかどうか最も決定的な障壁である
- モースも「良いインフォーマント(情報提供者)」を選ぶ一般的な基準を提言
- 第1選択肢
  - ・インタビューの質問に答えるため、研究上興味深い行動をするために必要な知識と経験を有している
  - ・省察をして言語化する能力を持ち、質問に応じる時間があり、研究に参加する用意がある

⇓これと対比されるのが

- 第2選択肢←ここに多くの資源を投入しないよう提言
  - ・インタビューに時間を提供する意思のある人々
- サンプリング戦略のまとめは p. 150 の囲み 11.1 を参照

#### 【サンプリングの目標としての「広さ」と「深さ」】(pp. 150-151)

- サンプルから研究に関する情報が豊富に得られるかどうか重要
  - ①できる限り広い領域をカバーする狙い②できる限り深い分析をする狙いの間を揺れ動くもの
    - ①はできるだけ多くの、かつ異なった状況の事例を使ってそのフィールドの多様性を描き出すことを目指す
    - ②はフィールドの一例や一部分に分析を集中することによって構造を詳しく明らかにしようとする
- 経済的・時間的なリソースが限られている場合にはどちらかに絞るのが良い

#### 【サンプル中の事例の構成】(pp. 151-154)

- サンプリングにおいて考慮される事例とは何かーその事例は何を代表するのか
- サンプリングやデータ収集および解釈を一連の事例研究として進めたところ、書

く事例は5つの側面において代表的となった(→詳しくは p.151-の 1-5 を参照)

1. 個々の事例はまず、一般的な背景における特殊な個別の社会化の結果として捉えられる。この社会化を通じてそれぞれの事例は異なった主観的な意見、態度、視点を持つにいたり、それらが現在のインタビューによって見出される事になる。
2. 「個別化された普遍」が具体的に何を意味するのかを明らかにするためには、事例を特定の制度的文脈を代表するものと捉える必要がある。その文脈の中で事例にあたる人は行動するが、その人は他者に対してもその文脈を代表する。
3. 事例は特定の専門家 professionalization を代表する。各事例にあたる人は、各事例の考え方や行動の仕方に表れる。
4. 事例は発達した主観性/主体性を代表する。
5. 事例は相互行為を通じて作られた行為の文脈を代表する。

〈まとめ〉

- サンプリングの決定は研究設問との関連でのみ判断できる
- 選択されたサンプルが適切かどうかは、その研究が目指す一般化可能性の程度に関して判断される
- サンプリング戦略はフィールドを解明するための様々な道を示す
  - ◇ フィールドの周縁部分からサンプリングする
  - ◇ フィールドの内側から解明していくこともできる
  - ◇ サンプルの構造を前もって定義してデータの収集を通じて構造を埋める
  - ◇ 資料の選択、収集、解釈の中で段階的にサンプル構造を発展させて細分化する
- あらかじめ定義するか段階的に進めるかは研究設問及び目指す一般化のレベルに従って下すべき
- 質的研究の特徴(第6章)は、サンプリング戦略においても関連し実現される  
→サンプリングを決定することで、何がテキストの形で実証的データとなるのか、テキストから具体的に何をどのような比重で用いるかが決まる